

CD版『トクシマ・アンツァイガー — 徳島俘虜収容所新聞 —』出版

3月末までに「トクシマ・アンツァイガー」の翻訳と原文とを収録したCD電子ブックを出版予定です。これはドイツ館史料研究会が2007年の『ディ・バラック』第4巻出版後翻訳作業を進めてきたもので、このほどやっと出版できることになりました。とはいっても財政逼迫の折柄、前回までのような印刷・製本による出版はとうてい不可能なので、CDを使った電子出版となりました。残念ながら、編集締め切りの段階ではまだCDプレスが終わっていませんので、完成品を写真で紹介することはできません。CDジャケットデザインの原画をここに掲載しておきます。入手については鳴門市ドイツ館にお問い合わせください。



CDジャケット（2つ折りの表面）

「トクシマ・アンツァイガー」とは、板東俘虜収容所に来る前の2年半近く徳島に収容されていたドイツ兵捕虜たちの発行した収容所新聞の名称です。「アンツァイガー」は新聞の名称に用いられて「…報知」「…新聞」といった意味になります。この新聞は週刊（但し最後のころは隔週刊）で、1915年4月から翌年9月までの約1年半に全部で67号発刊されていました。記事内容は政治状況や戦況およびその論評といったものは当然のこと、日本の風土、歴史、文化を紹介するものもあります。私たちにとって興味深いのは、捕虜たちの普段の生活を反映するエッセーや催し物の記事で、彼らの信条や態度、喜怒哀楽、

日々の行動の一端がうかがえます。仲間同士の確執なども浮かび上がってきます。挿絵入りのユーモア欄もあって、これは敵国を揶揄するものが多いのですが、収容所生活を対象にしたものは心情的なものも含め、さまざまな側面から彼らの様子をうかがい知ることができます。

この翻訳の底本となった「トクシマ・アンツァイガー」の原本はドイツ、フレンスブルクのミュルヴィック海軍学校が所蔵しています。興味深いことに、これは元々ベートーヴェン「第九」交響曲の日本初演の指揮者、ヘルマン・ハンゼンが所持していたものでした。各号の第1面に彼の署名があるのです。彼は帰国後フレンスブルクに住んでいましたので、この収容所新聞がその地の海軍学校に寄贈されることとなったのでしょう。これを海軍学校のご好意により鳴門市ドイツ館が借り受け、マイクロフィルムに収めました。詳しい経緯については2002年9月発行の『ルーエ』第4号に書かれています。インターネットでは以下のURLからご覧になれます。

<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/germanhouse/ruhe.html>

（なお、ドイツ語版『ルーエ』では第2号です。同じページからリンクがあります）

そこにも書かれていますが、さる全国紙での田村一郎元館長の記事がきっかけとなり、国内外から多くの方々の協力の申し出があって、筆記体で書かれた謄写版印刷の原本からラテン文字体への解読・転記作業が行われました。このことによって当研究会は、ほぼ翻訳作業を行うだけでよくなったわけで、非常にありがたいことでした。このような折角のご協力を無駄にしないためにも、今回の翻訳版発行にあたって、ドイツ語版もCDに含めることとしました。これは紙への印刷・製本ではページ数、予算から不可能だったことで、電子出版の利点でしょうか。ただ、ドイツ語版には日本と中国の地名や人名などについての注釈は付けていません。ドイツ語のみをお読みになる方には不十分な対応になり、申し訳ないことと思っております。

この新聞の印刷は謄写版を使っています。若い方ではご存知のない人がほとんどだと思うので簡単に説明すると、ロウ原紙

(口ウを引いた薄い和紙)を細かなやすりの上に置き、その上から鉄筆で字や絵を書きます。そのときにガリガリと音をたてることから俗に「ガリ版」とも呼ばれています。こうして作成した口ウ原紙は鉄筆が通過した部分の口ウが取れて、インクが透過するようになります。そこでこの口ウ原紙の上からインクを付けたローラーを転がすと、下に敷いた紙に文字や絵が印刷されるという仕組みです。『トクシマ・アンツァイガー』にはそのような作業を描写した挿絵があって、そのキャプションから「堀井謄写堂」の製品を使っていたことが分かります。なおガリ版については志村章子著「ガリ版ものがたり」という本がちょうど出版されたばかりですが、その中の一章に板東俘虜収容所で謄写版印刷も取り上げられています。興味ある方にお勧めします。



謄写版での印刷の様子

最後に、翻訳を行ったドイツ館史料研究会とは鳴門市から委託を受けてドイツ館所蔵史料の調査研究と俘虜収容所関連の企画展示などを担当する組織で、現在の会長は井戸慶治徳島大学准教授です。このほか調査研究に携わっているメンバーは田村一郎元ドイツ館館長、瀬戸武彦高知大学元教授、田中優岡山大学元教授そして川上三郎ドイツ館館長となっています。

ドイツ館収蔵品の紹介

チター、チター楽譜、写真

今回紹介するものは、厳密にはドイツ館所蔵ではありません。ドイツ館が預かっているといった方が正確なのかもしれません。というのは、元所有者のお孫さんからこれらを譲り受けたリュネブルク独日協会が、鳴門訪問の記念品として鳴門市日独友好協会に贈呈したものだからです。当館では折にふれ、日

独友好の証としてこれらの品を展示したり、演奏会での展示・演奏に活用してきました。演奏会については前号で「内藤敏子 & 北村哲朗 チターと歌のコンサート」をご紹介しました。

さて、この元所有者はルドルフ・ユングといい、板東ではなく、兵庫県の青野原（あおのがはら）俘虜収容所（神戸市から西北約30km）に收容されていたドイツ兵捕虜でした。ユング氏については80歳になった折、地元紙「ジーゲナー・ツァイトウング（ジーゲン新聞）」に紹介記事が掲載されています。それによると彼は音楽が好きで、軍楽隊ではチューバを吹いていました。捕虜となって仕事もできず、その無聊を慰めるためにお兄さんが持っていたようなチターを作ることを思い立ったそうです。ひとりではなく、仲間も熱心に手伝ってくれたそうで、それらしい様子を写した写真も寄贈品の中にあります。チターはもう一つの写真でおわかりのように、多種の弦が必要になりますが、これも自作で、鋼線と銅線を巻いて作ったそうです。写真には確かに針金を巻きつけたボビンが手前に見えます。解放されるまでにチターを6台製作したそうなのですが、ドイツ館にあるものは当時のものではなく、故国に帰った後1957年に製作したものです。

この楽器について専門家の鑑定を仰ぐべく、またドイツ館での演奏にも使っていただければとチター演奏の第一人者である内藤敏子さんに見ていただきました。それによると、やはり素人が作ったものらしく、楽器の構造上の補強が不完全な可能性があって、新しい弦に張り替えると張力が強すぎて楽器がゆがむかもしれないとの話でした。さらに一部のフレットが摩耗してへこみ、演奏しづらいなどの問題が判明しました。また伴奏に用いる固定弦の調弦法がほとんどの人が使っている方式と異なるウィーン方式とのことで、なぜドイツ人、それもウィーンから遠く離れた中部ドイツ出身の人がこの方式を使うのか不思議がっておいででした。その後この点についていろいろ考えてみて、次のような説明が可能ではないかと私は推測しています。それはチターと同時に寄贈された写真から判明したのですが、チター製作中の写真にルドルフ・ユング（右から2人目）とその仲間が写っています。拡大しないと分からないのですが、左端の人がかぶっている水兵帽のリボンに“S.M.S. KAISERIN”の文字が読み取れます。すなわちこれは旧オーストリア・ハンガリー二重帝国の巡洋艦「カイゼリン・エリーザベト」のことです。青野原にはドイツ兵だけでなく、この巡洋艦の乗組員も收容されていたことは周知のことですが、この写真からはオーストリア出身者が楽器製作の仲間になっていたことが分かります。つまり、その人からチター製作について色々教わった可能性があるのです。その人は当然ながらウィーン方式を身につけていたことでしょう。



チター製作中の人たち



元捕虜製作のチター

このチターの他に、捕虜時代に作成したという楽譜も2冊寄贈されています。板東俘虜収容所で使われていた楽譜はまったく発見されていない中、収容所で使用した楽譜はとても貴重なもので、これも前号で紹介した演奏会でその中から3曲ほど選んで演奏していただきました。チターの楽譜はピアノの楽譜と同様五線を2段つかうのですが、その記譜法も独特で伴奏の方が普通使用されるへ音記号ではなくト音記号で、かなり戸惑うとのことでした。そしてもう一点、楽譜の製作年代について問題提起をいただきました。記譜されている曲の作曲者の中にはその活動が第一次世界大戦以後としか考えられないような人の名前が見られるようで、今後の調査が必要になりました。しかし、1冊の楽譜の五線紙にははっきり東京の楽器店名が記されていますので、これは捕虜時代のもの、少なくともその時に作り始めたものであることは間違いありません。

写真はチター製作中のもの以外にも多数ありますが、中国の天津または青島の頃が多く、青野原と見られるものは10枚ほどです。ユング氏がチターを弾いている写真は天津にいる時のものです。



天津の兵舎で食事中の仲間と（一部）

映画作家のブリギッテ・クラウゼさん

ドイツ・ハンブルク在住の映画作家、ブリギッテ・クラウゼさんが昨年7月と今年1月の2回にわたって板東に来て、取材と撮影を行いました。板東以外では東京や丸亀などでも取材を行ったそうです。板東では遍路宿に滞在しながら、撮影助手兼通訳の方と2人で精力的にあちこちに出かけていました。鳴門市ドイツ館でも国際交流員を中心に取材先との交渉などのバックアップをしました。

この映画は現在編集中で、タイトルは「板東の捕虜一日独の過去への旅」（ドイツ語からの直訳です）となるようです。どのような作品になるのか、楽しみです。

2011年12月～2012年3月に行われた行事

12月4日（日）ドイツ村友の会クリスマスの集い

12月10日（土）ドイツ館クリスマス会

12月17日～18日

ドイツ館のクリスマスコンサート、板東道生ライブ

12月17日～1月29日

奥山実秋絵画展「ドイツの観光名所と文化財」

12月23日（金）コーラス9コンサート

1月22日（日）新年コンサート

2月4日（土）男女共同参画宣言都市記念式典

2月8日～17日 ヴルフ・ドイツ大統領展

2月10日（金）全国小学校英語活動実践研修会

2月26日（日）フリーダンス・フェスト

2月26日～3月14日 ヘルマン・ハンゼンと「第九」ートクシマ・オーケストラの軌跡一展

3月16日～4月1日 鳴門百景フォトコンテスト入賞作品展

3月18日(日) ドイツワインと鳴門のお寿司のハーモニー

「日独の美味しいかたち」

3月24日(土) 講演「ドイツの環境活動」 講師：ロバート・テルシグ

このうち、「ヘルマン・ハンゼンと「第九」—トクシマ・オーケストラの軌跡—展」について少し説明しておきます。これはベートーヴェンの「第九」日本初演の指揮者ハンゼンと、彼が徳島収容所での設立当初から率いてきたオーケストラの活動を写真と演奏会プログラムを中心に追ったものでしたが、徳島の部分の記述はそのほとんどを上述の『トクシマ・アンツァイガー』に書かれていることを元にしてしています。この新聞のおかげで一部をのぞく全演奏会の開催日とその曲目だけでなく、楽団の構成メンバーや指揮者ハンゼンの活躍ぶりを知ることができたのです。

また展示した中には楽団全員の記念写真もありましたが、その中にひとりだけ日本人将校がまじっています。この人は高木中尉で、ドイツ語にきわめて堪能だったそうですが、ここにいる理由はただそれだけではないことが『トクシマ・アンツァイガー』の記事から見えてきます。この楽団の演奏に刺激されて、みずから弦楽器の演奏を習い始めた日本人将校がいると書かれていますから、そんなことからその写真に収まったとも考えられるのです。



「どこにしようとそこがドイツだ」の 独語訳本、ドイツで出版

鳴門市ドイツ館で発行されている板東俘虜収容所案内書「どこにしよう、そこがドイツだ」のドイツ語版が、ドイツのEuropäischer Hochschulverlagから出版されています。これは元国際交流員パトリック・ワグナーの翻訳したCDドイツ語版

(ドイツ館で販売)を元にしてありますが、さらにアンヤ・ハンケルが日本について知識のない人に理解しやすいように注を補完したりするなど、再編集に当たってくれました。この本を通じてドイツでも板東について知る人が増えれば願っています。ただ108ページと薄い割に定価が34.90

ユーロとかなり高いのが唯一不満ですが、これは少数数の出版では仕方ないのかもしれませんが。



研究誌第9号

「青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究」第9号が刊行されました。今号の内容は、ディルク・ギンター「徳島俘虜収容所」、富田実「富田久三郎翁とドイツ兵俘虜—板東収容所時代の純ドイツ式牧舎について—」、田村一郎「日本における「戦没者慰霊」試論—檜山論文などを契機として—」、井上純一「ワンダラーとしてのポーネル—牧師館の子Hermann Bohner(4)—」、富田弘訳『「ラーガーフォイアー」連載記事「松山」』、瀬戸武彦「24名の俘虜収容所長」(掲載順)で、多彩なテーマが扱われています。特に第一次世界大戦時の捕虜と収容所に関心のある方にお勧めします。定価500円ですが、一般の書店には置いていませんので、購入については鳴門市ドイツ館までお問い合わせください。バックナンバーについても同様です。

この研究誌に論文をお寄せになりたい方は、その中に掲載の投稿規定をご覧ください。(「青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究」刊行会)

👁️ 編集後記

東日本大震災から1年が過ぎました。いち早い復興を祈らざるをえませんが、とりわけ大津波が残した爪痕とがれきの山、原発事故による広範囲にわたる放射能汚染が今なお復興の妨げになっていることを聞くと胸が痛みます。

今年度のドイツ館では例年以上に行事が目白押しで、不慣れな私たちは何となく追いつかれていたような気がしたものです。それでも色々なお客様を迎えるのは楽しいことでした。